

心理療法場面において生起する ＜ハプニング＞の意義に関して

川 寄 克 哲

心理療法という場の中で思いもよらぬ＜ハプニング＞が起きることは少なくない。それは例えば、かなりの回数を重ねて治療者が来談者の話から思い描いてきた治療的読みを裏切るような意外な事柄が来談者の口から語られ驚くような場合や、治療的展開が滞っているときにいわゆる外的な事件が偶然に起って治療が進展したり、あるいはなぜだかわからないが急に治療者や来談者の中に怒りや悲しみの感情が湧き起ってきたりすることなどさまざまである。また、来談者が訴える「症状」自体、本人にとっては訳の分からないものであり、まさに不意打ちされたような＜ハプニング＞であるとも言えよう。このように＜ハプニング＞は来談者の意外な言動、外的な事件、感情、症状発症など様々な形をとって生じるが、そこに共通するのは治療者(あるいは来談者を含めて)の意図・予想を超えてそれらが生じるということ、及び、経験的にそのような出来事を契機に治療が転回することである。

心理療法は学派や立場によって基盤とする理論や技法、また単純に症状除去を目指すのかそうでないのかといったその目的でさえ相当異なるが、いずれにせよなにがしらの＜変化＞が生じることを重視していることは共通していよう。この＜変化＞と＜ハプニング＞は密接なつながりを持つと思われる。なぜなら、さきに述べたように＜ハプニング＞とは治療者や来談者の「読み」を裏切るもの、つまりはその意味体系に収まりきら

ないものであり、これを収めうるように意味体系が変わることこそが、心理療法で重視される〈変化〉の根底にあると本論は考えるからである。そこでまず、心理療法における治療者の「読み」を検討することからこれらのことを考察していきたい。

1. 「訳の分からない」ものと〈意味〉

近代的な心理療法はS.Freudの精神分析の成立から始ったと言ってもよからう⁽¹⁾。周知のように、精神分析の歴史はヒステリーの治療から始まる。器質的に異常はないのに目が見えないとかコップの水が飲めなくなるとかそういった症状は精神分析以前では「訳の分からない」ものとして共同体から排除される質のものであったが、S.Freudを待って初めてそのような「訳の分からない」症状の背後に隠された意味が前提される。そして、初期には催眠や前額法、後期であれば自由連想などの技法でもって症状の背後にある抑圧されていた出来事を患者が意識化すること、つまりその〈意味〉を自我の中に位置付けることにより治療に至らせようという方向がとられる。

初期の精神分析ではこの隠された〈意味〉は過去の外傷体験に起因するとみなされる⁽²⁾。外傷体験は自我意識に受け入れがたいがために抑圧されるわけだが、それゆえにそれらが回帰してきたときには当人の意識にとっては「訳のわからない」異物として立ち現れることになる。これこそが「症状」に他ならない。この症状を解消するためには封印された記憶を想起し、自我意識の中でそれが〈意味〉をもって収まることが必要とされる。

ここにみられるのは顕著に因果律的な枠組みである。つまりは、意識から排除されたものが原因で、それが結果としての症状を生じさせるわけである。因果律的な枠組みであるから治療としてはこの連鎖を逆に辿ることは論理的必然で、排除されたものを意識化、つまり〈意味〉付けること

で症状を消そうという方略となる。このようにS.Freudにおいてはその理論の根底に、意味のわからないものを意味付けることが置かれている。その意味付けの形態として精神分析では因果律的な枠組みを(多分、多くの精神分析家は複数の選択肢の中からこの枠組みを「選んで」採用していると自覚せずに)採るわけである。

2. ストーリーとしての「見立て」

このように精神分析では隠された〈意味〉の了解が重視され、またその了解の形態が因果律的であるわけであるが、当然、これは实际的な治療場面での治療者の姿勢においても反映される。たとえば土居(1977)はこれに関して「見立て」を提唱している。

土居は従来の精神科診療において診断と治療が分離していることを嘆き、そのアンチテーゼとして「見立て」を掲げる。この用語によって土居は以下のようなことを指摘する。つまり、(1)心理療法においては病歴の聴取、診察、治療が判然と区別されるものではなく、すべてが渾然一体となっている。(2)患者について分かることと分からないことの区別をつけることの重要性。(3)「見立て」はそれが起きる場である治療者-患者間の関係の関数(ファンクション)である。

本論の文脈で述べれば、(3)は心理療法の本質的なことがらであり、つまりは自然科学のように観察者/対象という具合に明確な区切り方を心理療法は枠組みとして用いない(用いえない)。治療者にとって患者とは明確に対象化されるものではなく、治療者と共に組み込まれてひとつのシステムを形成するものである(それゆえの「渾然一体」)。これは心理療法の特質として非常に重要で、(1)及び(2)は(3)のこの点から派生するものと考えられる。そもそも土居が「見立て」という語を使用したのも通常の医学のように患者を対象化して診断し、それから対象としての患者を治療していくといった科学的枠組みを心理療法では採用しがたいからであろう。

しかし、ただ「渾然一体」となっているだけでは治療は進展しない。だからこそ、(2)にみられるように、このような(科学的な視点からすれば)本質的にわかりにくい状況の中で精神分析ではあくまで「分か」ろうとするのである。これは先に触れたように、精神分析が隠された〈意味〉の把握を根本的な前提とするからである。この際に、土居が『ストーリー』を読む」という言い方でこの点を記述しているのは興味深い。

土居は治療者は「患者の話を、あたかもストーリーを読むごとく聞かねばならぬ」ことを強調し、さらにストーリーという形態をなさしめる重要な要因として、時間的経過及び治療者-患者関係の二点を指摘する。本論の立場でこれらを翻案すれば、これは、治療者-患者を含めたひとつのシステム内ではそのシステム自体を対象化することは困難であり、しかし、この困難な中であえてそれを記述しようとするればいわゆる自然科学的記述ではなく、「時間経過」的な「ストーリー」という形をとらざるを得ない、ということである。

土居は明言していないが、これは治療者-患者を含めたひとつのシステムとそれを記述するシステムとではそのオーダーが異なるということに因っている。この考え自体はB.Russell(1910)のロジカルタイプの考えに基づくものであるが、これは精神分析の枠内でも従来から「自我」／「無意識」、「一次過程」／「二次過程」などの用語によって区別されてきた水準の違いと平行なものと筆者は考えている。本論にひきつけて述べれば、「自我」というシステムはすぐれて因果律的な、つまりは時間経過的でありニアな分節の仕方を特徴とし、このシステムに収まらない領域^(*)の事柄を対象化せずに把握しようとする「ストーリー」という形になってしまう、ということである。そもそも、精神分析の始まりともいえるアンナの症例で、彼女自身がその治療を「お話療法」と呼んでいたことはこの傍証であろう。

3. 自我意識

この水準の異なる領域に関して、筆者は以前、先の後者（無意識）のシステムを前者（自我）のメタレベルとしてみる視点から論じたことがある（川崙、1989）。この考えは、あくまで自我が前提として先にあり、そこから逸脱したものの領域を無意識とする精神分析の考えとは重点の置き方が逆転している点で、G.Bateson や C.G.Jung、(井筒俊彦などが言う意味での)東洋思想的意識階層論に連なっている。中沢(1985)の簡潔な記述を借りて、この異なる水準間の特徴を述べると次のようになる。

自我意識はそれが特徴とする二項対立的な分節化の作用によって、世界から「山」、「川」などのように同一性をもった不連続な単位を切り出してくる。これらの単位は本質的に静的であり、経験世界はこの分節化によって無数の固定された名辞が積み重ねられたものとなる。しかし、一方、世界はこのような分節化を受ける以前、本来的に動的でたえまない変容の場である。このような世界に「静的」な相を持ち込む自我意識にとっては、このようなリアリティを捉えることは不可能で、必然的にパラドクスを抱え込む。そこで自我意識はこのパラドクスを解消するために「動態」を求めることになる。すなわち [S + V] 構造(主語 + 動詞構造)の成立である。VはSの体系が必然的に産み出すパラドクスを解消するために働くのであるが、これはリアルな世界のシュミレーションにすぎず、自我に特徴的なこの [S + V] 構造は世界の本来のリアリティを隠蔽してしまう。

言うまでもなく、仏教的な立場はこのような「自我」が造り出す迷妄から脱却し、真なるリアリティ(「空」)に至ろうとするわけであるが、この点については本論の趣旨から離れるのでここでは触れない。本論にとっての要点は、自我意識と無意識が上に述べたような水準の違いをもつこと^(*)、自我の(意味)体系の < 変化 > はそれと異なる水準をもつ領域(無意識)との接触に関係していること、及び、この接触を二項対立的な分節化を特徴とする自我意識は既述の表現で言えば、シュミレートされた「ストーリー」としてしか捉えることはできない、ということである。

「ストーリー」が心理療法において重要なものであることは言を待たないが、ここで肝要なのは今述べたことから言えば、「ストーリー」そのものよりもむしろ自我と自我とは異なる領域との接触こそが第一義的であり、「ストーリー」自体は二次的なものであるとことである。次節でこの点を少し詳しくみていこう。

4. 〈物語〉、〈運動〉、〈ハプニング〉

心理療法における「物語(ストーリー)」は河合(隼)(1992.1993)などを代表とする Jung 派も非常に強調するところである。しかし、河合(隼)も実は、物語をその底にある非物語的な領域の展開した形態とみており、その非物語的領域の方を第一義的に捉えているように思われる。たとえば、河合(隼)は例としてロケットに興味をもつ不登校児の例を挙げ、治療者は「大地から離れていくロケット」のイメージに「母から離れていく子ども」を重ねつつ、この子どもの心の中のロケットのイメージがどのように「説話的自己展開」していくかに関心をもって相手に沿っていくことの重要性を述べている。つまり、物語が「自己展開」する以前のある領域がここでは想定されているのである。

河合(隼)もこのような観点を論じるにあたって引用しているが、井筒(1983)が提唱する意識の層構造モデルは興味深い。これは、日常的な表層意識の下にイメージの場である中間領域が広がり、その底には「意味的『種子』」が隠在する「言語アラヤ識」、さらに最下には「意識のゼロポイント」を想定するモデルである。この中間領域で生起するイメージが説話的に「展開」し、表層意識において物語として捉えられるわけだが、つまりは物語自体ではなく、その背後で物語として展開してくる〈運動〉こそが本来的で重要なのである。もちろん、自我意識はこの運動そのものや運動が生じる起点での形態をそのまま把握することはできない。自我にとってはこの〈運動〉との接触(これが本論で言う〈ハプニング〉で

ある)はすぐさま「物語」として分節化され展開される。より正確にいうと自我にとって〈運動〉とは事後的に想定される質のものでしかありえない。

この意味で「物語」は自我意識に強く規定されているものであり、河合(俊)(1998)が Giegerich, W.などを引用しつつ、「物語」の自我中心性やその因果関係的なあり方から擬似自然科学になりがちな危険性を挙げて「物語」批判を展開しているのは至極もっともである。たしかに、既述したように「物語」が生じてくる〈運動〉こそが重要なのであり、この〈運動〉を見逃して自我の内での物語だけに注目してしまうと、すべては自我という文脈内の物語となってしまう、この自我という文脈(意味体系)そのものが〈変化〉する動きは消えてしまう。それゆえ、河合(俊)は物語を実体化したり、時間的な流れでストーリーが把握されがちな点を解体する視点として「構造」をもってきて「物語」と対比させる。さらにまたこの「構造」という視点も静的・固定化しがちである点を批判して動的な「弁証法」を提唱しているのは、本論で重視する物語の背後の〈運動〉を捉えようとする姿勢と通じるものと考えられる。

河合(俊)の批判は絶対視されがちな自我の視点を相対化し、自我中心的に統合されがちな「物語」を解体しようとする点で意義深い。しかし、「構造」という視点も、仮に自我以外の視点をとることが可能であるにせよある意味体系による「読み」の中からは現れないのではなかろうか。「構造」にせよ、「弁証法」にせよそれが有意味な限りは何らかの意味体系に照らしてしか捉えることはできない。システムの〈外部〉はシステムにとって「無意味」なのである。この点を見落とすと動的な「弁証法」も、先に述べた[S + V]構造と同様に、シュミレーションをリアリティと見誤る危険性が生じてくるだろう。そのときそれはもはや物語を解体する「構造」・「弁証法」ではなく、「構造」・「弁証法」という名の物語に、すなわち、「物語の解体」ではなく「解体の物語」と化してしまう。

自我意識にせよ、その他の意識にせよ、そういったある意味体系の内部

からみるならば、このような「物語」の解体としての〈運動〉を捉えようとすれば、ぎりぎりのところ〈ハプニング〉という現象としてしか捉えられないと本論は考える。既に少し触れたが、自我によって物語として展開される〈運動〉のその起点、つまり自我システムとそれと水準を異にする領域との境界で生じる接触のことを本論では〈ハプニング〉と呼んでいる。しかし、自我がそのシステムの内部では「物語」という形でしか把握できず、外部は自我にとって無意味であることを考えれば、この「物語」展開の原起点としての〈ハプニング〉という考えは本来論理的には矛盾を孕んだパラドキシカルなものである(そもそも、境界概念自体が数学的にもパラドキシカルなものであるが)。心理療法においてパラドクスが重要な意義を有することはG.Bateson、M.H.Erickson、神田橋など多くの臨床家が指摘するところであるが、本論の〈ハプニング〉という概念もこれらに連なるものであり、パラドキシカルゆえに意義を持ち、またそれゆえに記述しがたいものである。神田橋(1900)の「イメージの基盤に流れている『それ』・・・仮に『雰囲気』と命名することでその性状を暗示するに止めざるを得ない『それ』」という記述や、河合(俊)の「見とおす」(明言されていないが、これは「物語」やイメージの背後を見とおすという意である)という苦心を感じさせる言い方に示されているのと同様に、〈ハプニング〉もまた自我というシステムに属すると同時に属さないあやういあり様のものである⁽⁹⁾。しかし、というかむしろそれゆえに〈ハプニング〉は心理療法の実践において極めて重要な視点をもたらす。以下、事例に基づいてこの点を検討していきたい。

5. 事例から

物語としての「読み」とその起点としての〈ハプニング〉に関して、冒頭に列挙した〈ハプニング〉の種類の順で事例を通してみていきたい。いずれもなんらかの意味で治療的に「行き詰まって」いたときに〈

ハプニング>が起っていることに注意されたい。まずは「失策行為」である。

次の事例は筆者がスーパーヴァイズしたものである⁽⁶⁾。来談者は小学2年生の女兒で主訴は夜泣き。1歳半から母親から離されたり、夜になると非常に激しく泣き、徐々に日中でも泣くようになる。このころより夫婦間は陰悪で数ヶ月の別居などあったが、本児5歳時に父親の病気をきっかけに夫婦仲少し改善。この時期わずかに泣きがおさまるが、それ以外は現在も激しい泣きが続くので相談期間に来談し、遊戯療法を受けることになる。

かなり早い回から本児は箱庭に関心を示し、次のような内容の箱庭を作成する。川を作って「川だから金魚」とお父さん、お母さん、子どもの3匹の金魚を置く。次に「金魚を食べようとしてるの」と川のそばに鷺を置く。さらに箱庭よりも大きなワニを置こうとするが中に入らないので断念。筆者がこれを聞いたときの印象は、本児の症状の背後にあるものが家族の危機と関係していることは明白だが(金魚の家族を狙う鷺)、しかしさらにそれを超えるものが治療関係の枠におさまらないという形で示唆されており、治療者との関係の中でそのような大変な問題をやっていけるのかという不安であった。次の回、本児はまた箱庭を作成するのだが、海に金魚を置こうとしたときに手をすべらせて落としてしまい、金魚が割れてしまう。

こどもが金魚を落としたこの〈ハプニング〉はS.Freudの言うところの「失策行為」としても色々な「読み」が可能であろうが、筆者の頭に浮かんだのは、金魚が落ちて「死んだ」ときに前回箱庭に収まらなかった巨大なワニが今回みえない形でやってきて金魚を襲った、というイメージであった。前回、箱庭という枠に収まらずに実現できなかった表現が、今回、治療者・来談者関係という枠の中で顕現したという「読み」である。しかし、このような「読み」以前にそのような「読み」(物語)の展開へと至る〈ハプニング〉が起ったということがまず重要である。子ど

もの抱える問題が治療関係の受け皿を超えているが故に治療が行き詰まるときに、その治療関係が〈変化〉することとこのような〈ハプニング〉が生じることがここでは同時的に生起している。実際、この回の後、本児は豊かな表現を治療の「枠」内で示しつつ、主訴は解消されていくのである。

もうひとつ「失策」の例を挙げよう。村瀬(1995)が記載している事例である。患者は精神分裂病の青年で、毎回のように繰り返される母親への激しい憎しみと、「先生のような人のお母さんなら」との言葉に治療者はかなり辟易していた。治療者はそうせざるを得ない母の立場や言葉にならないその心情を患者に示唆したり、ときに母親の気持ちを代弁したりするが、患者の母への憎しみは一向に和らがない。ある日、患者の母親非難の迫力におされ、治療者はつい「そうねえ、あのお母さんと一緒に生きていくのは、大変なことかもねえ・・・」ともらしてしまう。とたんに患者はきつとなって「あのお母さんとはって、何です。僕には母の悲しみが痛いほどピンピン判るのです。母は先生のように幸せな生い立ちの人と違って、苦勞の連続で生きてきた人なのです。母には人を愛するゆとりがないのです・・・」と憤って語る。治療者は患者の気持ちを汲みきれなかったことを詫び、これを契機に患者は母との関係、母の気持ちや立場の洞察を深め治療は進展していく。

筆者の感触では、間違いなく村瀬は治療関係が行き詰まったときにこのような治療者の「失策」という形で〈ハプニング〉が生じることと治療関係の〈変化〉、進展とが同時に起ることがあるのを捉えているはずであるが、論の中では教育的配慮からか治療者が患者に同一視しすぎて親を敵視しては治療が進展しないことを指摘するにとどめている。

村瀬のこの事例は「失策」というよりも「転移・逆転移」という「読み」で捉えられることの方が一般的であると思われるが、この観点から同質的な事例を次に挙げよう。

河合(隼)の事例(1992)。来談者の青年が厳しく残酷な父の下で子ども

時代にどれほど苦しい経験をしたかを涙ながらに語る。しかし、治療者はなぜか感情がついてゆけずについて、すると青年は、これほど辛い話をしてるのに治療者が涙も出さずに平気で聞いているのはけしからんと怒り出す。治療者が、そういわれても涙が出ないのだから仕方ないなど「薄情な」応答をしていると、青年は猛烈に怒りだし、怒りと涙の時間がしばらく続いた後、不意に「先生、私がこのように目上の男性に正面から怒ることができたのははじめてです」と語る。このとき、治療者は感情が流れ出し、これまでこの青年の冷厳な父親の役割を知らずに演じていたことに気がつくのである。この後、治療の過程が進んでいく。

青年・父親の関係が青年・治療者関係に転移され、治療者が相補的に逆転移を起して冷たい父親の役割をしてしまう、という「転移・逆転移」の枠組みに照らした「読み」は的を得たものであるし、有効であろう^(*)。しかし、治療者の意図を超えて「冷厳な父親」に知らずになってしまうという〈ハプニング〉が起ったことこそがまず大切なのであり、「読み」はそれに続いて事後的に再構成されたものにすぎない。もちろん、本論はこのような「読み」の有効性を否定するものではない。このような「読み」がなければ我々は治療にコミットすることはできないし、なにより、我々はこのような「読み」の世界に生きる存在である。しかし、何よりもまずこのような「読み」の起点として起こる〈ハプニング〉に治療者が開かれていることが重要だと思われる。

「失策行為」や「転移・逆転移」という「読み」は基本的には精神分析の「物語」であり、既に触れたように因果律的な形態をとっている。次に述べるのはこのような因果律の形態に収まりにくい〈ハプニング〉の例である。

筆者の自験例(川寄, 1987)。来談者は小学3年の男児、主訴はチック。生育歴としては父親が入籍しておらず、本児は祖母を「おかあさん」、祖父を「おとうさん」と呼んでおり、実母はその名前からの愛称で呼んでいるとのことであった。家族が多くを語らないため、父親が同居してるのか

どうかなどは一切不明であった。このような家族背景の混沌さと呼応するかのよう、に、遊戯療法の中で少年は動物や怪獣の人形を使って戦いを表現するのだが、それは必ず三つ巴であり最後は決まって勝敗のわからない混沌としたものになっていくのであった。この混沌とした戦いは非常に大切なことが表現されていると感じられながらも、やはりその意味を「読み」にくく、このような意味のわからない混沌とした感じが少年の置かれている環境での彼の感触と似ているのかもしれないとの思いで、治療者としてはただこの混沌さを味わうことを心がけていた。このような回が10回ばかり続いた後の回で、治療者がいつものように待合室に彼を迎えにいくと、本児は廊下のソファーにぐったりと横になって寝ている。祖母によれば乗ってきたタクシーに酔ったとのこと。彼女がそのまま待合室に引っ込んでしまったので、治療者が戸惑いながらも少年の横についていると祖母が今まで面接場面に顔を一度も見せなかった母親を連れてきてたので治療者は驚く。あいさつをした後、彼女たちはまた引っ込んだので治療者と少年は所在なく廊下にいたのだが、そこへまったく関係のない子ども(多分、他に来談してきている人の子どもだと思われる)が突然やってきて、二人を指差し「パパと来ているー」と言う。生育歴で述べたように、本児の父親関係は特異なものであるがために、父親に関しては(面接場面でも多分家庭でも)ある種のタブーになっており、触れがたい事柄であった。そこへこの子どもの言葉であるから、少年を横に置いている治療者としては追い詰められたような気分で身動きがとれなくなる。しばらくしてから少年は気分がよくなったと言うので、待合室に戻るとそこにはサングラスをした(あまり堅気にはみえがたい)男性が先の少年の母親の膝に頭を置いてごろりと横になっており、多分この男性が少年の父親であろうと直感した治療者は非常に驚く。

この〈ハプニング〉を挟んで、次の回から少年は今までと見違えるように面接場面で快活になる。三つ巴の戦いも中心が析出されるように3の中の1が他の2を従えて敵と戦う表現となり、それ以降、徐々に治療者と

の1対1の戦いへと移行し、症状としてのチックは消失していった。

このような〈ハプニング〉は「父」ということを巡って、ユング派の用語を使うならば「共時的」に起ったという見方もできるであろう。無論、この出来事を次のようにフロイト派的・因果律的な「読み」で考えることも可能である。受け入れがたい父親と一緒に来たから少年の気分が悪くなったのであり、この父との関係の気配をやってきた子どもは無意識に感知したが故に「パパと来てる」と言ったのである、と。ここで問題なのは、共時的な「読み」と因果律的な「読み」のどちらが「当て」いるのか、というようなことではない。どちらにせよ、それは「読み」なのであり、すでに繰り返し指摘したように「読み」は〈ハプニング〉の事後に成立するものであり、上述のようなことが「起った」ことが重要なのである。「読み」に関して述べれば、極論を言えばどちらを採ってもいいとさえ考えられる。

上に挙げたような例はさほど珍しいものではない^(*)。しかし、次のような〈ハプニング〉の例になると因果律的な筋は非常に辿りにくくなると思われる。

自験例。来談者は中学2年生の男子。学校でのいじめ(身体的暴力を含むかなりひどいものであった)をきっかけに不登校に。表情の変化は乏しく、また非常に寡黙で面接場面でも口数は少ない。ほとんど毎回の面接を通して彼が選んで治療者とやったのはオセロゲームであった。それはなにか黙々と作業を積み重ねていくような雰囲気であり、全体的にモノトーンな反復が繰り返されるような印象であった。もちろん、治療者はただ単にゲームをしているのではなく、色々と考えながら関わっていたのであるが、彼を含む布置が〈変化〉しがたく、行き詰まっている感覚は拭えなかった。そのような時期のある回にやはりオセロゲームをしていたのだが、ふと気づくと白番の治療者が駒を置ける場所が一ヶ所しかない。仕方なくそこに置くと次に来談者が黒の駒を置いて、先に置いていた治療者の白駒が一行パタパタと黒にひっくり返っていく。次の番になった治療者が

みるとまた置けるところは一ヶ所しかない。置くと先のパターンの繰り返しである。2, 3度繰り返すうちに「あっ」という思いで治療者も来談者もこれが「パーフェクト」に向かって収束していつているのに気がつく（このときの彼のニヤツとした表情は印象的であった）。治療者はなぜか感激しながら、徐々に盤上の自分の白駒が消えていくのを見ていた。結果は黒一色。今までの来談者の打ち方から見てこれは間違いなく彼の技量によるものでなく、偶然のなりゆきであった。しかし、この回を境に彼は安定した登校を再開しはじめるようになる。

このような〈ハプニング〉をたとえばユング派ならば「共時性」という語で「分節」し、論じるかもしれない。実際、Jung(1952)はこの事例に質的に近い例をいくつか挙げて「共時性」という語をもって論じている⁽⁹⁾。「共時性」に関してはいずれ稿を改めて論じたいが、本論にとって大切なことは、「共時性」もしかしまたひとつの〈読み〉であり⁽¹⁰⁾、〈ハプニング〉の後に事後的に構成されたものであるということだ。

6. 「行き詰まり」とパラドクス

前節では、治療が滞って行き詰まっている際に〈ハプニング〉が生じて治療が進展する事例を示した。これらの〈ハプニング〉を失策や転移・逆転移、共時的現象など様々に「読む」ことは可能であろうが、繰り返して指摘してきたようにまずそのような〈ハプニング〉が「起った」こと自体に視点を合わせることが大切であろう。すなわち、〈ハプニング〉の内容ではなく（内容が了解されるのは「読み」を経過した後である）、それが起った瞬間（そもそも本論での〈ハプニング〉という語はこの瞬間を指すものとして使用している）に治療者が開かれていなければならない。この瞬間が自我意識とそれと水準を異にする領域との境界で生じるものと考えらるならば、〈ハプニング〉とは既に述べたように自我意識の内部での〈意味〉づけに染まるのではなく、また外部にあるものとして〈

無意味 > なのでもないパラドキシカルな事柄である。このパラドキシカルな性質が心理療法での行き詰まりの < 変化 > と関連していると思われる。なぜなら、本論で述べているような行き詰まりこそ本質的にパラドクスに他ならないからである。

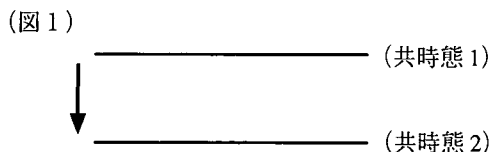
第4節の中沢の記述を思い起こそう。自我意識は(その二項対立的な分節化を特徴とするがゆえに)本来パラドクスを含んでおり、いわばそれから逃れるために S + V 構造(これは「物語」の基本的骨格である)を形成するという戦略をとっている。このような自我意識というシステムそのものが < 変化 > するということは、自我意識と同義であるこの戦略に破綻が生じることであり、このとき隠蔽されていたパラドクスが顕現する。この事態をシステム内部からみたものが「行き詰まり」という状態にはかならない⁽¹¹⁾。システム体系が変化するとシステム内の一要素である「症状」という異物の < 意味 > は変わる。症状の < 意味 > を変える(とは、「症状」としては消失するわけだが)ことを治療というのならば、心理療法とは治療者が真の意味で行き詰まること、即ちパラドクスが顕在すること、即ち < ハプニング > が生じること、即ち今までのシステムが < 変化 > することであると言えよう。つまり、「行き詰まり」、< ハプニング >、「パラドクス」、< 変化 > は同時的な相にあるということである。

神田橋(1990)は「・・・変化するには十分に窮しなくてはならない。早め早めに窮していくのがコツであると連想した。そして、道が拓けず困っているときは、実は、窮していることを心のどこかで否認していることに気づいた。窮している自分のありさまに充分に直面しさえすれば、ほどなく、自分の内部に崩壊感を伴った変化が生じし、引き続いて新鮮な連想が突然湧いてくることをくりかえし体験した」と述べている。至極名言であり、本論で論述してきた現象を技法論的な視点からみた見解と言えらう。また、Lacan 派の J.D.Nasio(1992)の「・・・分析において予期せぬ出来事が起こるのを私は待つのです。私は驚くことに対して心の準備をします。分析家が望みうる最善のものは、患者が彼の不意を突くことです。も

ちろん、患者がわざと・・・であってではありません。・・・不意打ちとは患者と分析家を同時に襲わなければなりません。・・・患者がいつか苦痛から解放されるためには、あなたはことさら彼を解放しようとはせず、不意打ちに対する準備態勢を整えておくことです」との文中の「驚く」という語は、〈ハプニング〉が自我によって捉えられ、かつ未だ〈意味〉が形成される直前での反応を的確に表現している言葉だと思われる。

ただ、本論では既述してきたように、〈ハプニング〉がきっかけで〈変化〉が起こるのでも、またシステムの〈変化〉によって〈ハプニング〉が起こるのでもなく、これらは同時的な相の下にあるものと考えている。このような本論の考えの近いものとして、立川(1986)がF.Saussureの丹念な読み直しから提唱している言語システムの「共時態」／「通時態」の考えは示唆的である。立川は、Saussureのいう〈通時態〉がいわゆる言語学一般で流布されている通時態とは意味が異なることを指摘する。この〈通時態〉とは、「言語の変化・運動の相である。言語の変化そのもの、《できごと》は、つねに主体の意識を逃れ去る。・・・《できごと》は「痕跡」とでもいうべきかたちでしか、つまりある変形をこうむったかたちでしか意識に現われでてくることができない」。つまり、自我意識にとっては「状態」しか存在せず(これが「共時態」である)、〈変化〉は意識から逃れ去ってしまうのである。ここで、共時態というシステム自体の〈変化〉を共時態の分節化にのらないものとして《できごと》というタームで示しているのは本論の〈ハプニング〉と類似している点でも示唆的である⁽¹²⁾。

彼が記載しているクリアな図を引用しよう(図1)。



(立川健二「力」の思想家ソシュール」 224 頁より)

「〈通時態〉とは・・・共時態から共時態への移行(passage)そのもの、ふたつの状態のあいだの矢印そのもの(↓)である」。本論の文脈に戻ると、この矢印(↓)という〈運動〉・〈変化〉そのものは自我意識には捉えられず、捉えた途端、それは直ちに「物語」になってしまう。この「物語」になる直前のぎりぎりの位相を本論では〈ハプニング〉と呼んでいる。むろん、繰り返し指摘してきたように、この位相はパラドキシカルであり、また自我意識にはそのようなパラドクスとしてしか〈ハプニング〉は立ち現れない。「行き詰まり」はそのひとつの形態である。

〈ハプニング〉を矢印(↓)と意識(一)との接触点と考えるならば記号的には(↓)とでもなるであろうか⁽¹³⁾。ここでアナログカルに連想を広げると、この記号はたとえば、蛙の卵の受精を思わせる。蛙の未受精卵はどこを起点に左右対称分裂を行うかの差異はまったくなく、決定されていない。起点となるのは精子の接触点で、その点を境として卵は分裂していく。興味深いのはこれが精子でなくとも、ラクダの毛先で突っただけでもそこから卵は分裂と成長を開始することである(もちろん、染色体の数が半分となり、生殖能力をもたない蛙となるが)。つまり、「差異の刻印者」さえあればよいのであり、その内容は分裂の仕方(二項対立的分節化!)に関係ないわけだ⁽¹⁴⁾。これは自我意識、〈ハプニング〉、〈変化〉・〈運動〉の関係にパラレルではなかろうか。受精以前の卵にとって「外部」の精子は無意味であるし、受精という「接触」が分裂に関して決定的であり、「何が」接触したのかは分裂を開始した後の卵の「物語」の中でしか〈意味〉を持たない点で。

この接触すなわち〈ハプニング〉はパラドキシカルなものであり、心理療法に話を戻すとそれはたとえば「行き詰まり」という形で現れてくる。治療者(あるいはそれを含む心理療法場面というひとつのシステム)からみると、それは二つの選択肢しかない状況での第三番目の選択肢のようなものである。この三番目の選択肢は矛盾をはらむものであるがゆえに、選び取る質のものではなく、それは「生きられる」質のものでしかあ

りえない。「読み」が成立していないのであるから）。治療者は治療の転回点において〈ハプニング〉を、すなわちパラドクスを「生きる」のである。

（注）

- （*1） Ellenberger,H.F(1970)や中井(1990)も指摘するようにシャーマニズムなどの原始精神療法は、決して現代の心理療法の未発達な形態ではなく、それぞれ固有の治療体系を有しておりその体系の枠組みに照らして病いを意味付け、実践的な治療テクニックを持っている。この承譜は本質として現代の心理療法に連なっており、さらには今後の可能性を開く意義さえもつものであるが、本論では便宜的に一応、この流れを棚上げし、近代的文脈での心理療法の枠組みの中で考察していく。
- （*2） 周知のように、この「外傷体験」は後に外的な事実ではなく、心的リアリティにおける事柄であると S.Freud によって修正を受けることになる。
- （*3） システムに収まらない領域とはシステムにとって「外部」ということであるが、ここでの「外部」とはもちろん、物理空間的な外部ではなく、ある位相を示すものである。たとえば、システムそのものの〈変化〉などはシステムとは水準を異にしており、ここで言う「外部」のひとつの例である。
- （*4） 「無意識」をこのように中観仏教的な意識層構造論とアナログスに論じることは、その本来の概念からの甚だしい逸脱であるとの批判があるかもしれない。しかし、本論では本文でも述べているように、無意識を自我よりも第一義とする視点から論じており、この点で理論的にも浸透し合うものと考えている。詳しくは井筒(1983、1993)、Bateson,G(1972)、川崙(1989)などを参照のこと。
- （*5） たとえば、このあやういあり様の隠喩として「スイッチ」を例に挙げてもいいであろう。「スイッチ」は電流が流れていないときにはただ単に導線の一部であり、それは存在していない。また、電流が流れているときは、それは回路の一部であり、やはり存在していない。しかるに、「スイッチ」とは電流が流れる／流れないことを決定する「瞬間」に現れる、ある位相の下でのみ在りうる在り様のものである。〈ハプニング〉も同様である。
- （*6） この事例は千葉大学 高橋智子氏によるものであり、筆者がスーパーヴァイズしたものである。また、以下の自験例を含めてプライバシー保護のため、本質を損なわない範囲で事実を変更している。
- （*7） 先の村瀬の事例においても、治療者が逆転移的に「非難がましい母親」になっており、治療関係という生きた関係の中でこの母親(治療者)に対して患者が怒ることができたことが治療的に意味があったという「読み」が成り立つ。しかも、ここでの怒りは母親を擁護するものであり、この〈ハプニング〉において母への怒りと擁護というパラドクスが重層的に「生きて」いる。
- （*8） たとえば、山中(1978)の緘黙症の少年の例。3年半緘黙状態を続けていた7歳の少年が遊戯療法の展開の中で元気が出てきて、学校での授業中に消しゴムを投げたりするようになる。この行為にポジティブな面もみる教師は我慢していたが、靴が教室を飛び交う段になり、この少年に「あんたでしょ!」と叱る(実は他児の仕業であり誤解だったのだが)。この時、少年は「はくじゃない!」と始めてしゃ

- べるのである。興味深いのは(山中也触れているが)この「誤解」というパターンは、この少年がしゃべらなくなったきっかけになった出来事と同様パターンでもあり、〈ハブニング〉というものが発症から治癒に至るまで、色々なところに重層的に「織り込まれた」ようになっていて印象があることである。
- (*9) たとえば、Jungの見ていた患者で極度に合理的であるが故に治療に進展がみられなかった女性があるときに黄金のスカラベ(コガネムシ)が自分に与えられる夢をみた。それを治療者に話しているときに窓からコガネムシが飛び入ってくる偶然(〈ハブニング〉)が起り、それ以降、「変容のプロセスがついに動き始めた」例などは有名である。
- (*10) 共時性の定義は「意味ある偶然の一致」である。つまり、無数に起っている偶然の中から〈意味〉のあるものを選択するという「読み」を行っているわけである。
- (*11) 冒頭にあるように本論では「症状」も〈ハブニング〉とみなしている。このような視点をとることで、「症状」は単に消去すべき疾病とみなすのではなく、その人のあり方(自我意識体系)が〈変化〉する可能性が潜在しているものとみられる。これはJung派を中心としてかなり広範囲に影響を与えている、「症状」を目的論的に捉える考え(「この症状はなんのために現れたのか」と整合するものである)である。
- (*12) 立川は、「共時態」を前意識に、「通時態」を無意識に対応させており、この点でも立川のモデルが本論と非常に近いものであると言える。
- (*13) もちろん、このような図はずさんである。〈変化〉(↓)は意識(―)に対してメタレベルになっており、水準が異なるのであるから。つまり、メタレベルが下位のオブジェクトレベルに「降りて」くるわけで、メビウスの輪的な図が本来はふさわしいのであろうが、本論では便宜上、(↓)というようなイメージを思い起こさせる「接触」という語を使用してきた。
- (*14) この蛙の卵の例は、本論とはまったく異なる文脈ではあるが、G.Bateson(1972)が挙げている例を引用した。

< 文献 >

- Bateson, G: Steps to an Ecology of Mind. Harper & Row. 1972. (佐伯泰樹他訳：精神の生態学。思索社，1986.)
- Ellenberger, H.F: The Discovery of The Unconscious. Basic Books Inc, 1970 (木村敏他訳：無意識の発見。弘文堂，1980)
- 井筒俊彦：意識と本質。岩波書店，1983。
- 井筒俊彦：意識の形而上学。中央公論社，1993。
- Jung, C.G: Gesammelte Werke. 8
- 神田橋條治：精神療法面接のコツ。岩崎学術出版社，1990
- 河合隼雄：心理療法序説。岩波書店，1992
- 川寄克哲：チックを主訴とする少年 ―混沌とした戦いから、あるいは混沌とした戦いへ―，京都大学教育学部心理教育相談室紀要，第14号，107-115, 1987
- 川寄克哲：心理療法におけるメタファーとしての解釈，京都大学教育学部紀要，第35号，

心理療法場面において生起する〈ハプニング〉の意義に関して（川寄）

301-311, 1989

村瀬嘉代子 子どもと大人の心の架け橋, 金剛出版, 1995

中井久夫: 治療文化論. 岩波書店, 1990.

Nasio,J.D : Cinq lecons sur la theorie de Jacques Lacan, Editions Rivages, Paris, 1992 (姉齒
他訳: ラカン理論 5つのレッスン. 三元社, 1995)

Russell.B & Whitehead.A.N, principia mathematica, Cambridge.1910 (岡本賢吾他訳: プリン
キピア マテマティカ 序論. 哲学書房, 1988)

立川健二: <カ> の思想家ソミュール, 風の薔薇, 1986

山中康裕: 少年期の心. 中央公論社, 1978.

(心理学科 助教授)